

## 淵の底から

文房具をまき散らしながら落ちるランドセルが花壇のポピーを押し潰す光景を、立花律は忘れることができない。小学校三年の春、クラスメイトが律のランドセルで豪快なキャッチボールを提案し、二階の教室の窓から「誤って」落としたのだと、担任の田中聡子先生は説明した。律の隣に立っていた犯人の本山力は、笑いを堪えた顔で、「ごめんつ」と手を合わせた。律がランドセルに結んでいたツリガネソウのキーホルダーを見た本山が、面白がって触ったことが遊びに発展したのだという。

本山はいつも男子の中心になって、休み時間になれば野球に熱中する活発な少年で女子からも人気があった。一方で欲しいものがあれば持ち主に無断で手を出し、傷を付けんばかりに荒く扱った末に凶々しく「も

らっていい？」と要求する悪癖があつた。しかし、人気のおかげで大抵は許されていた。アニメキャラクタ―の練り消し、ちよつと変わったキーホルダー、音符の形をしたクリップ。

律は本山とは三年になつて初めて同じクラスになつたが、苦手なタイプだ、という印象が強く、話したことはなかった。田中先生の前で互いに謝り、その場は解散となつた。しかし、その後、本山はわざわざ帰り支度をする律の席に来て「園芸部だから放課後、花壇に寄つて帰るだろ？手間をはぶいてやったんだよ」と挑発的に言った。へらへらした本山の顔を見て、律は大事に育てていたポピーが無残に潰れた姿を思い出し、カツとなった。立ち上がり、肩を力任せに押すと本山はバランスを崩して床に尻餅をついた。驚いた顔で律を見上げた本山はみるみる怒りを露わにした。「調子にのるな」と叫んで、タツクルしてきた本山を律は避

けることが出来ず、正面からまともに受け止めてしまった。そのまま後ろのランドセルの棚に背中をぶつける。元々力の弱い律は野球の得意な本山に力では勝てない。その後は一方的に肩や足を蹴られ、律はうずくまり、暴力が止むのを待つしかなかった。クラスには帰り支度をする数人のクラスメイトがいたが、誰も仲裁しようとはせず、黙って一方的な「喧嘩」を見ていた。

本山との花壇の事件以来、他のクラスメイトからも律への攻撃が始まった。下駄箱には泥が詰められ、花壇用のホースシャワーで水を浴びせられることもあった。机には油性マジックペンで名前と共に「オトコオシナ」の文字がでかでかと書かれ、それがきっかけで臨時のホームルームが開かれた。田中先生は事件の概要をクラスメイトに語って聞かせた後、全員に目を閉じさせ、律へのいたずらをした人は手を上げるようにと促したが、薄目を開けて律が見た限り、誰一人とし

て手を挙げた者はいなかった。

律はいつの間にかクラス全員に無視されるようになった。休み時間、人の来ない校舎裏に逃げ、一人小説を読んで過ごす事が律の日課になった。

何を掛け違えたのか律には分からなかった。いずれにしてもランドセルは傷ついたし、同じくらい自尊心も傷つけられた。律は少しずつ人に関わる事が嫌になっていった。

一年が経ち、律は四年生になった。五月、初夏の風が吹く校舎裏の木の下で、本を読んでいた律は突然、本山に声をかけられた。

「いつもここで何しているの？」

四年でも本山とは同じクラスになったが、事件以来、一言も口を聞いていなかった。その為、何故話しかけられたのか律には不思議だった。クラス中から相変わ

らず無視され続けていた律は、本山の何気ない一言に嬉しくなつて、「小説読んでるんだ」と答えた。

「どんなの？面白い？ちよと見せて」

本山は興味深々な様子で聞いてくる。律は気持ちが大きくなつて、

「いいよ 冒険小説なんだ」と言つて本を本山に手渡してしまつた。本山は本のページを少しめくり、律を見た。

「本が好きなんだ」

「うん」

律がそう答えた瞬間、本山は笑顔のまま、ページを破つた。繰り返し、数ページを破つたところで興味を無くしたように残りのページの束を地面に捨てる。律は突然、何が起こつたのか分からず、うろたえた。

「それ僕の本・・・」

そう言いかけた律の右肩に何かがぶつかってきた。律

は衝撃で思わずのけぞり、腰をついた。右肩が熱くなり、痺れる痛みがあつた。律は理由を考えるよりも先に、両腕で身体を庇った。腕に運動シューズの底が激しくぶつかる。何度も何度も繰り返される、その蹴りに律は耐えられなくなり、「やめて！」と叫んだ。蹴りは止んだが混乱と恐怖の中、律は立ち上がれなかつた。蹴るのを止めてくれたのかと律が腕を下ろそうとした時、右の脇腹に重い衝撃があつた。律は左によるめいた。遅れてきた激しい痛みと息苦しさに唾液が口から垂れた。

「一年前のお返し 先に手を出したのはお前だからな」  
耳元で本山の声が聞こえた。とたんに左肩をぐいと押され、抗う間もなく律は仰向けに倒された。いつの間にかクラスメイトの数人が本山を中心に律を取り囲んでいた。

「顔はやめとけ バレやすいから」本山の言葉に、律

は怖くなり、起き上がろうとしたが、すぐに同じ場所に蹴り倒された。何度も何度も蹴られ、ついに律はあきらめた。もう起きてはいけない。律は地面に突っ伏し、埃っぽい土の匂いをかぎながら本山達が飽きてどこかに行ってくれることを願った。

「抵抗しねーな」

動物実験をするような、陽気な本山の声が聞こえる。押しつぶされそうな圧力を感じ、これ以上、声を出すまいと律は精いっぱい力で喉にせり上がってくる嗚咽を抑えようと努めたが、そうすればするほど、それは大きくなった。

チャイムが聞こえてきた。

舌打ちと、バタバタという足音がして辺りは静間にかえった。律は嗚咽に肩を震わせながら、ゆっくりと立ち上がり、あたりを見回した。地面に無数の靴跡が残し、同じものが律の服のあちこちに刻印されていた。

## 「起立 礼」

遠く教室から声が聞こえる。律は今からやるべき事だけを考え、授業の終わりを待って教室に戻った。

先生が居ない事を確認し、一番後ろの自分の席に戻ると律は急いで帰り支度をした。四十人のクラスメイ  
トが黙って視線を送ってくる。その中で本山が突然、  
律に近づき、右手を差し出してきた。親しみの籠った  
(ように律には見えた)笑顔を浮かべる本山に、律は先  
ほど起きた事を認めたくないという弱さから警戒を緩  
めてしまった。

本山は妖しい光を目に宿し、律を見下ろしている。  
右手を開き、握手を求めている。

「喧嘩した覚えもないけどさ 仲直りだよ 仲直り  
な」

律は本山を見返し、その言葉を頭の中で何度も反芻  
した。すべては律の勘違いでただの悪夢だったのでは



ないか。律は縋<sup>すが</sup>るように本山の手を握り返そうとした。その瞬間、本山は律の出しかけた手を勢いよく平手打ちした。ジンとするしびれが右手から伝わってくる。「ハッ」と鼻で笑う声が聞こえ、律は椅子を後ろに引っ張られて床に尻もちをついた。

周りから空気が震えそうな笑い声が上がった。律は何が起こったのか分からずにしばらく動けなかった。

本山は顔を近づけ、言った。

「何？おまえ？握手だと思った？んなわけねーじゃん」  
得体のしれない激しい感情が胸の奥から湧き上がり、  
本山の顔が滲んで見えた。輪郭のぼやけた影が崩れ、  
声だけが遠くに響く。

「な、やっぱりひっかかったろ？」

本山の声に「面白かった！」と誰かが感想を述べている。高ぶるものを必死で抑えながら、律は立った。嫌に頭は冷静で一人一人の声を拾っていた。

「幽霊が立ち上がった 怖っわ！」

「あのボロ椅子 俺らが捨ててやろうよ」

膨らんだ感情とは裏腹に、口からは何も出てこない。

ただの黒い群衆が固まりとして目の前に蠢いて見えた。

それから律は学校に行くことをやめた。

夏休みを一ヶ月前に控え、律は母の洋子と二人、マンションの七階にある自宅で今後の事を話し合っていた。窓からは黄昏のオレンジ色の光が差し込み、洋子の顔半分を照らしている。律が不登校になって以来、洋子は単身赴任の父、輝幸に代わり、学校の田中先生と何度もやりとりをした。時には電話越しに声を荒げ、学校の責任を追及した。結果的に律はしばらく学校を休み、折を見てスクールカウンセラーと面談をするという運びになった。洋子は律を見て「ごめんね」と言った。特別養護老人ホームで介護士として働く洋子は、

連日の仕事の疲れと律の学校での事件の対応で眠れない日々を過ごしていた。目の下に出来た化粧で隠せない隈が痛々しく見え、律は自分が情けなかった。

「あなたが最初に、あの本山って子に何かしたのが悪いって言う人もいるって」

「でも僕はランドセルを投げられた」

「そう でもそのことはクラスの誰も知らないって言うんだって」

「投げられたんだよ」

「そうよね 私は律の事を信じる できれば、三年生の時 そんな喧嘩があっただってお母さんに話して欲しかった」

洋子はもの悲しそうにそう言って項垂れた。花壇事件の時、律は洋子にその事を一言も話していなかった。学校では喧嘩両成敗で解決した事になってしまっていたからだ。それに、その頃は輝幸がまだ家に居て、

楽しかった時期だ。休みの日に温泉旅行に行くとか、山に登ろうとか、様々な家族の楽しみを提案してくる父。そして毎日、テーブルに洋子の好きな季節の野花を摘んで生けていた。たまに家で料理を作ると言いだし、大抵は火加減を間違えたり、調味料の割合を考えずに味付けして失敗していたが、その後片付けをする洋子は何故か、とても楽しそうだった。律もしょっちゅうトランプやら将棋やらオセロやらのゲームの対戦相手になってもらった。わざと負けることが嫌いな輝幸は全力を出すと宣言し、僅差で律に負けることも少なくなかった。「おまえは賢いな」と笑いながら次の勝負を催促する父を律は好きだった。子どもではなく対等に接してくれる父。律は家に帰ってわざわざ学校での嫌な話をしたくはなかった。学校で耐えれば家では楽しい時間が待っているのだから。たまに気むずかしくなる洋子も、輝幸がいる時は本当に朗らかに、幸

せそうに笑うのだ。

輝幸の単身赴任が決まり、洋子と二人暮らしになったのは新四年生になったばかりの頃だった。輝幸は「お母さんを頼んだぞ」と言って家を出た。

最初の頃、洋子は食事に洗濯にと輝幸がいる時と変わらない家事をしていたが、一週間もすると「仕事が忙しくなってきた」と夜の食事をコンビニの総菜で間に合わせるようになった。朝七時半には家を出て、夜は九時を回らないと帰ってこない。それでも日曜日の昼だけは「手作りの味も大事よね」と言ってハンバーガーやら、カレーやらを作ってくれていたが、すぐにそれも冷凍やレトルトパックになった。いつのころからか、朝食は律が作るようになった。律は覚え立てのいびつなスクランブルエッグや味の薄いコンソメスープ、甘すぎるフレンチトーストを作れるようになった。洋子は朝、ほとんど食べない。量は律の半分以下だ。こ

れで昼までにお腹が減らないのかなと律は心配した。律は洋子の為、見よう見まねで覚えた珈琲を入れながら、起きてくるのを待つ。広いダイニングで、ぽっかり空いた輝幸の定位置の空間席を見て、律は父を思い出すことが少なくなっていることに気づく。罪悪感と寂しさが胸の奥から這い上がり、律は流しで唾を吐いた。窓から入り込む朝の光がひどく押しつけがましかった。やがて律が他の家事の一部も肩代わりし始めた。と洋子は、ことあるごとに注文をつけるようになった。洗濯したタオルは隅と隅を合わせてピンと伸ばして干すこと。掃除機は畳の目に沿ってかけ、チリをしつかり吸い取ること。お茶を飲んだだけでも茶渋や口の脂がついているのだから、注ぐだけじゃなくスポンジで洗うこと。律は洋子の言うことを守り、不器用な手先で時間をかけて取り組んだが、「授業の予習復習はしつかりやってね」とやる気を挫くようなことも平気で

言われた。そして「中学受験まであつという間なんだからね」と付け加えた。注意と否定。律はその二つの意味以外の言葉を洋子から聞くことがほとんどなくなっていた。律が本山からランチを受け、学校に行かなくなつたのは、この頃だった。

不登校になり、ひと月以上が過ぎた六月のある朝。

「りっちゃんは今も早いね」

台所で律が朝食の準備をしていると背中から、かすれた声が聞こえた。洋子が少し乱れた首回りの髪を右手で撫でつなけながらダイニングに入ってきた。律の横を通り過ぎながら「ありがとう」と囁き、席に座って手を合わせる。律は慌てて向かいに座り、同じ儀式を経て朝食を食べ始めた。眠そうな洋子はしばらくコーヒーカップの取っ手を持ったまま、料理をじっと眺めている。律は恐る恐るスクランブルエッグを口に運

ぶ。何度も繰り返すようになった食卓の沈黙は律をひどく緊張させる。洋子との会話は減り、律は母にとって自分は何なのだろうかと考えるようになった。洋子は律の様子など一切意に介さぬ様子で、首にかかった長い黒髪を煩わしそうに手でかき揚げ、耳にひっかけている。

律が頑なに学校に行くことを拒み、スクールカウンセラーとの面談を断り続ける為、いつしか洋子は「その気になったら言いなさい」と言っ、自分からは学校の話をしなくなった。仕事の忙しさもあつてか、洋子の頬は少しこけ、律には日に日に痩せていつているように見えた。律が家事を覚えるのに必死になったのは、そんな洋子を何とかしたいと思ったからだ。その責任の一部を律は感じていた。

「夕ご飯の準備も手伝えるよ　お母さんは何時くらいに帰るの？」



律が自分が出れることを絞り出すように提案すると、洋子は顔を上げた。しかし、その目が自分ではなく、後ろの壁のカレンダーに向けられていることに気づき、律は声のトーンが下がった。

「お母さん今日も遅いのよ　ごめんね」と洋子。そしてようやく食べ始める。洋子は出来損ないのスクランブルエッグを一かけらずつ口に運ぶ。しかし、すぐに食べるのを止めた。

「鍵とお金をいつもの所に置いておくから　何か買って食べて　インスタントはダメよ」

慣用句のように、感情の乗らない調子で洋子は言った。律は所在の無さを感じて、ケチャップが絡まってぐちゃぐちゃになったプレートのス克蘭ブルエッグをさらかき混ぜた。口に運ぶ気にもなれずにフォークでしばらくいじくり回していると、「食べ物で遊ばない！」と怒られた。声の大きさに驚いて顔を上げた律

を、洋子はこの日、はじめて見ていた。わずかな怒りと愛情を含む、その瞳が懐かしかった。輝幸が家に居たころのようなまなざしを向けてくれるのなら、いつまでもスクランブルエッグをいじくっていたいと律は思った。しかし、瞳はすぐに光を無くし、洋子は静かに食事を再開した。洋子はきれいな手つきでわずかな量の朝食を食べかす一つ落とさずに食べた。その様子はまるで未来のAIロボットのようだ。軽く手を合わせ、会釈すると音もなく皿を下げ、洗面所に消えた。

律は誰もいなくなった向いの席の空間を見ながら、もそもそと朝食を続ける。輝幸の姿を思い出す。朗らかに笑いながら、よく律に「食べないならお父さんが食べてしまうぞ」とからかう父の姿を。食事の後、律は台ふきを濡らしてテーブルをシミ一つないよう、一念に拭き上げる。そうすることが洋子の目を少しでも自分に向けるための儀式だ。チリ一つ落ちていなければ

ば、少しは喜んでくれる。しばらくして、化粧を終えた洋子が台所に戻ってきて、テーブルを見た。無表情のままテーブルの隅を指さした。

「まだパンくずと卵のシミが残っているよ」

律は洋子の指先のそれを認めて、「ごめん」と答え、すぐに拭き直す。洋子は少しの間、その様子を見ていたが、すぐに興味をなくし、洗面台へと戻っていった。それでも律はテーブルを拭き続ける。輝幸の不在が洋子の心に影を落としていることを律は感じていた。どうしていいか分からぬまま、律は近所で見つけてきた野花をテーブルの小さな花瓶に生けた。輝幸がそうしていたように。殺伐とした家の中、みずみずしい色を添えるツリガネソウが、洋子の心の平穏を保つ最後の頼みだった。律は時折、切ない気持ちでその花を見入ってしまう。

律は度々、悪夢にうなされた。夢には本山が現れ、またクラスメイト達と共に律を殴り、蹴った。律は夢の中で本当に自分に生きる価値があるのか、常に疑うようになった。まだわずかに抵抗する自尊心が「どうして僕が」と叫びを上げ、嘆きを発する。そんな時、律は殴られるほどに、蹴られるほどに感じる痛みが、自分に価値がないから与えられているものだと思うようになった。本山の力の暴力は次第に洋子の言葉と態度の暴力へと置き換わっていく。それは肉体的な苦痛よりも鋭い痛みとなって胸を刺す。ほとんど残りカスのようになっていた自尊心をさらに貶め、律の心は淵のように暗く底が見えない闇の源泉となっていた。

夏休みまで後、一週間となった頃。スクールカウンセラーの面談を再三、何かと理由をつけて断ってきた律に洋子は、「頼むから学校に行って」と苛立ちを隠

せない様子で言った。その言葉を聞いた時、律は家を出る決心をした。

深夜二時、律は洋子の寢息に耳を澄まし、起きない確信を十分に持った後、布団を出た。最新の注意を払って隣の自分の部屋に移動し、机の下に隠しておいた外着に着替える。奥に、かつて輝幸から誕生日プレゼントにもらった何冊かの小説を見つけ、バックに押し込んだ。靴を履き、ドアノブをゆつくりとひねった。

マンションの外は明るい満月だった。二歩、三歩とゆつくり歩み出て、玄関を振り返る。月の光に照らされた両隣の部屋の窓とは対照的に律の部屋の窓は階段の影になって黒く塗りつぶされている。律はしばらく、その影を見つめた。

街頭がいらないくらいに照らされた住宅街の道はひっそりとして、遠くを走る車の音だけが薄く響いている。頭には物心がついたばかりの頃、何度か行っただ

けの祖父母が暮らす山村が浮かび、胸が高鳴った。しかし、すぐにその高鳴りは、本山と洋子の影に塗りつぶされていく。本山に向けられてきた歪な好奇心と、洋子に向けられてきた懇願とあきらめと無関心の感情が律の胸を押し潰す。律は肩を震わせ、まっすぐ目の前に伸びるアスファルトを歩くスピードを速めた。

山村を流れる一ノ瀬川と二ノ瀬川の二つの川が一つとなり、黒川と名を変えて、ダム湖の一角に注ぎ込んでいく。山の奥深くから流れ出て、強い日差しに温められながら腐った落ち葉や時にはネズミの死骸を浮かべて緩やかに流れるこの川を見下ろしながら、トラックターが川沿いの県道を、その流れ以上のゆるやかなスピードで走っていた。黒川の行き着くダム湖の湖畔にはバス釣りの船や、釣り客相手のアイスクリーム売り、

観光遊覧船のチケット売り場などの店がひしめき合っていた。山村に来る観光客のほとんどは湖畔に集まる。土産物屋や貸しボート店など、湖での夏の行楽を楽しむ為に必要なものを扱う店が一通りそろっているからだ。よく晴れた日などは遊覧船に乗るため、貸しボート店に長い列ができた。若いカップルや、絡まった糸をどうにか解こうともがく釣り人、家族のアテンドに力を使い果たし、ベンチでぐったりしている父親の姿が、湖畔のあちこちに見受けられた。だが湖に流れ込む川の上流に目を移すと、県道から少し離れた山際に、小さく古い民家が軒を並べている様が窺えた。黒川に合流する前の細い一ノ瀬川を臨んでちょうど対岸、県道からずいぶん離れた山奥の静かな場所に、「民宿みね」はあった。

家を出て徒歩とバスの乗り継ぎを繰り返し、律が祖

父母の営む宿がある山村に着いたのは翌日の夕方だった。何度も携帯に掛かってくる洋子の着信を無視したまま、律は懐かしい家に飛び込み、二人を驚かせた。

「じいちゃん　ばあちゃん　お願い　夏休みの間　僕をここにおいて」

二人は律の切羽詰まった様子に、すぐに頷いて、涙と共に孫がこぼす家出の理由を黙って聞いた。やがて祖父の洋二は怒りだし、「いくらでもおれ　洋子には俺が話をつける」と力強く言って電話をかけた。しばらく言い争う声が聞こえてきたが、それは次第に落ち着き、三十分近くして電話は終わった。洋二は律を見て

「うちの宿の手伝いと夏休みの宿題をやるなら居ていいということだ　宿題は後からここに送ると言っていた」と洋子の言葉を伝えた。「お前の母さんはな　自分分は病気だから病院に行くと言っていた　律に謝りた



いそうだ」律は洋二の言葉をどう受け止めたらいいか分からず、涙の痕が頬でひきつるのを感じながらうつむいた。

「今は何も考えるな　好きな事をしろ　お前が好きな人間しかここにはいないんだからな」。洋二の言葉に律はこれまでため込んでいたものが一気に溢れ、再び嗚咽を漏らした。

一週間もすると律は宿の仕事に慣れてきた。

「遊覧船のお客さんが多くなってきた　おっちゃんはどうしばらくこん　これやるわ」

そう言って浅黒い肌をした年配の男が律に釣り竿を差し出した。男の顔は逆光で見えなかったが笑っていることは雰囲気で分かった。男は毎年七月中頃になると、この宿に連泊し、ダム湖で釣りをする常連だと自分で言った。律は、男に渡す宿泊料の釣銭を勘定している

洋二の傍に竿を持っていき、「この釣り竿、僕にくれるって」と感触を伺った。無言で頷く洋二の後ろで、祖母のキヨが麦茶と水菓子とを盆に準備しながら、律の方をぎゅっと睨みつけた。

「この子には冗談が通じませんよ」

キヨを尻目に律は古い観光マップを広げ、自分が遊びに行きたい場所を探った。ダム湖のお菓子売り場、ブルーベリーの観光農園はお金がかかる。心中淵。不思議な名前の淵が記されている。魚のイラストが描かれていた。何か釣れるのだろう。

「今から川　行ってこい」

マップを熱心に見る律に、洋二が言った。

「一ノ瀬川までじゃぞ　橋の下がよう釣れるやろう」

洋二は自分が子どもの頃、よくコイやフナを釣っていた場所を教えた。

「小麦団子作れ　ばあちゃんが分かる」そこまで言う

と洋二は律の肩に手を置き、顔を真正面から見据えた。

「その地図に心中淵って淵があつたやろう 絶対に行くな 今は立ち入り禁止になつとる」

「分かつた 心中淵って変わった名前だね」

「大昔に、男と女がな」

説明を始めた男に洋二が「説明せんでいい」と大声で制した。

「とにかく昔 人が溺れた深くて危ない淵や そこには行くな」

律は大きく頷き、「おっちゃん また来てね」と男に挨拶して、「ばーちゃん」と叫びながら台所のキヨの元へかけていった。

洋二に教えられて行つた川で、律は結局一匹の魚も釣ることはできなかった。見るとその川底にはコイらしき影がたくさん見えたが、キヨに作ってもらつた小

麦粉団子には全く見向きもしなかったのだ。釣れぬと何が何でも釣りたいという衝動が沸き上がり、律は思い切ってダム湖近くの散策道あたりで釣り場を探すことにした。高く上がった真夏の太陽に照らされた森の緑が、赤く整備された散策道に影を落としている。その道の一角に朽ちかけた看板が打ち捨てられていた。

見ると「心中淵」の名前が記してある。看板の横には奥の森へ続く獣道があった。道は枝打ちされていない杉の木々と伸び放題の下草に覆われ、看板の残骸がなければ、その先に淵があるとは誰も思わない。律は逡巡したが、昼間の森の明るさが律の好奇心を後押しし、立ち入り禁止の先へと気持ちを誘った。律は獣道に分け入り、森の奥へと歩き出した。

少し進むと明るい森は鬱蒼としたものに変わり、真昼だというのにあたりは薄暗くなった。幾重ものツタが杉の樹幹に絡まり、今にも律を地中に絡めとらんば

かりの勢いで伸びている。その不気味さに律は時折、足を止めたが、まだ見ぬ淵への好奇心をガソリン代わりに歩を進めた。どれぐらい歩いただろうか。やがて蟬の声に水音が混じるようになった。心なしか森の空気にほのかな水気も感じる。律は淵が近いことを察して歩を速めた。

水音を辿り、進んでいくと、果たしてそこには淵があった。洞窟のような岩場に囲まれ、遥か上から一筋の小さな滝が落ち込んでいる。淵の天井は雑木の葉で多くが覆われ、日の光の大部分を遮っていた。その隙間を縫って差し込む細い幾本もの光は水飛沫に反射し、滝の姿を輝かせていた。律はしばらく、その滝の姿に見とれた。そして淵の方に目を落とした。滝を受け止める淵は黒々とした水流の変化を絶えず、繰り返している。泳げない律が一步でも足を踏み入れればたちまち飲まれ、浮かんでは来れないだろう。律は滝つぼか

ら少し離れた。距離と共に滝音が遠ざかる。淵を囲む静かな森を後ろに、律は黒々とした遠くの水面をじっと見ていた。ふいに夏休み前の記憶が鮮明に蘇ってきた。律は気分が悪くなり、暗い考えが浮かんできた。

今、僕が淵に飛び込めば、学校にも、家にも帰らなくてよくなるじゃないか。

突然、カシャつという機械的な音が聞こえた。律は驚いて顔を上げると、滝の傍の岩場に人影があつた。腰まである黒髪と細いシルエットでそれが女のようにだと分かったが、逆光で顔までは見えない。そこまで分かると同時に律は水を浴びせられたように、ぞつとした。幽霊を連想したのだ。あとすぎりし、後ろの草むらにしゃがみこむ。律は怖くて動けなくなった。律は後悔した。自分が考えてはいけないことを考えたから、幽霊が現れたのだと思った。淵の底から自分を迎えにきたのではないか。しかし、それならば自分が望んだ

ことだ。律は迎えに来たならば、こちらから行ってやろうと勇気を振り絞り、再び「幽霊」の方向に意識を向けた。よく見ると、それは若い女だった。スキニーのジーンズに白いブラウス。岩場に腰掛け、後ろ手で腰あたりまで掛る髪を煩わしそうに触っている。女は律のしている前でズボンの後ろポケットから携帯を取り出し、滝に向けた。カシャッと先ほどと同じ音が聞こえた。ここまでを見て、律はその人影が観光客だと気づき、全身の力が一気に抜けた。

女は岩場の上を淵の方へ進み、足を延ばして水際ギリギリの所に降り立った。しゃがんだり、向きを変えたりしながら、どんどん水際に近づいていく。うねる水面が今にも彼女を飲み込んでしまいそうに思えた。律がしばらくその様子を見てみると、女の影が突然、揺らいだ。「あつ」という短い悲鳴と共に女がバランスを崩して、水に落ちた。飛沫に交じって携帯が宙を

舞い、岩場にカランと音を立てて落ちる。

律は先ほどとは別の恐怖心に駆られ、女が落ちた場所  
に駆け寄った。黒々とした淵の水面は泡立つばかり  
で人の姿は見えない。動揺を押し殺し、最善の可能性  
を探ろうと律は声の限りに叫んだ。岩場を歩き回り、  
叫び続けたが、声はほとんど滝の音にかき消された。

声がかすれてききたころ、律の右手の方から「はい」と元気な女の声が聞こえた。驚いて振り向くと、  
ずぶ濡れの女が淵から流れ出る清流の方から歩いてこ  
ちらに向かってきていた。

「びっくりしたー！」

律は女の顔を正面から見て立ち尽くした。彫のある顔  
立ちと二重のぱっちりした瞳は洋子に似ていた。そし  
て洋子よりも一回り以上、若く見える。律は吸い寄せ  
られるよう女に歩み寄り、話しかけた。

「大丈夫？」



話しかけた自分の声が震えていることに気づき、律はなんだか恥ずかしくなった。女は笑顔を律に向けた。

「冷たいけど大丈夫　ありがと」

女はそれだけ言うのと視線を律から外し、岩場を探り始めた。

「とっさに携帯投げただけど、見なかった？」

「一緒に探すよ」と言って、律は女と一緒に淵の周りを探した。携帯は岩場の影ですぐ見つかった。画面に雷のようなヒビが入っていたが、壊れてはいないようだった。

「よかったー」

女は保存した写真データを確認しながら、岩場に腰を下ろした。

「いやー　ここきれいじゃんね　撮ったときだったのよ　すぐ評判になるよ」

女は自分が九死に一生を得たことなど既に忘れたかの

ように、携帯で撮影した画像の心配ばかりをしていた。

「禁忌を犯さないと得られないものってあるよね」

独り言のように呟き、女はまた携帯を滝に向かって掲げた。

「SNSにアップするんですか？」

律が不安になって尋ねると、女は

「ダメ？」と懇願するような声で聞き返した。

「今、道通れないし、人来れないから危ないよ」

「人、来れてるじゃん」

女はそう言って律と自分を交互に指さした。律は二の句が継げなくなり、自分がそもそも洋二の言いつけを破っていることを思い出して、言葉に詰まった。

「冗談 やっぱりダメよね」

女はいたずらっぽく返し、二人でシェアしましょう、  
と言って写真を見せてくれた。そこには光をまとう滝  
の姿が映っていた。無数の光源を、その身の回りに纏

いながら自身も輝く滝は神秘的だった。思わず無言で魅入る律に女は、「ちよつと撮り方を工夫したんだよ」と言い添えた。

「この子？」

女は岩の上で長い黒髪が含んだ水を絞りながら律に尋ねた。好奇心にわずかに上ずった、きれいな声だと律は感じた。

「そう」

「あなたは何しにここに？」

律の中では女を見た前後の感情が尾を引いていたが、改めて問われ、そもそも淵を目指した動機を思い出し、答えた。

「・・・釣り」

女は律の言葉に眼を輝かせた。

「ここって主とかいるのかな？」

女は淵の滝坪をちらちら見ながら、今度はブラウスの

裾を振じり始める。

「いそうね いや絶対いるわ いないとダメだわ こんなきれいな淵 神様みたいな巨大ナマズ？河童？結構、深そうだしね」

とても楽しそうに話す女に、律は先ほどまで抱えていた恐怖が解けていった。

「でもここ 入っちゃだめなんだ」

他人に目撃され、告白したことで律の中で罪の意識が膨らみ、良識の敷居に重く圧し掛かった。

「そうだろうね 看板朽ちてたし 道の草も刈ってなかったしっていうか道ほとんどなかったし」

律はその女の言葉を聞いて胸がざわざわした。彼女は、どうしてここに来たのだろうかと思っていたからだ。迷い込んだのだという可能性を考えていたが、彼女は、その雰囲気から十中八九、里の外から来た人間だ。それなのに立ち入り禁止に気づいていながら、それを乗

り越えてきたのだ。あまり知らない他人の土地の最奥に躊躇なく踏み込む女を律は恐る恐る見つめた。女は律を見つめ返し、媚びるような笑顔をして肩をすくませた。

「なんかあのボロボロの看板見てさ　心中淵って名前がもう気になってついね」

長いまつ毛の二重の瞳に正面から見据えられ、律はこれまで感じたことのない不思議な動悸を覚えた。その目はやましさをあぶりだすような光を発している。本当は心の中まで全て見透かされているのではないかと律は思い、滝つぼの方に視線をそらした。

その時だった。滝つぼに黒い巨大なうねりが見えた。「あっ！」

律は眼を見開き、その変化に気づいた女も遅れて淵の方を見た。泡立つ水面にてかる黒い肌がぬらりと蛇行しながら泳いでいた。妖しく身をくねらせるそれは巨

大で、自分くらい一口で飲まれそうだと律は思った。

「ウナギ？未知の生物かも」

再び、激しい水音がして、生き物は大きな尾を水面でうねらせ、とぷんと水の底へと消えた。

「はあー来た機会があったわ」

女は満足そうに言っ見て、白い歯を見せた。

「写真は撮り損ねたけど 撮るところじゃなくなるね  
実際みると あれが主だよ多分」

女は興奮した調子でまくしたてる。一緒に宝物を見つけたような、屈託のない女の様子に、律も嬉しくなった。

「誰にも言ったらダメだよ」

女の言うことが一瞬、律はどうしてダメなのか分からなかったが、すぐにこのことを言うことが二人が犯した禁忌をバラすことになると思い当たり、深くうなずいた。得体のしれない女と一つの秘密を共有しあった

ことが律の心をときめかせた。

「ねえ」

女は改まった調子で律に尋ねた。

「ところでさ この辺に宿ってないかな？そろそろ寒すぎてやばい」

律はその時、女の唇が紫色になっていることに気づいた。肩も震わせている。

「うちにおいでよ」

律は祖父母の営む宿の名を口にした。

「鉄砲玉のごと飛び出したと思ったら、お客さん連れてくるとはよか孫や」

キヨはご機嫌な様子で温かい茶を汲み、女の前に出した。女は温泉への入浴を済ませ、すっかり浴衣姿になって囲炉裏端に座っていた。キヨが入れた茶をうまそうに啜る。

「いやあ 湖がきれいで撮影に思わず熱がはいっちゃって 橋桁の下に入り込んで水際までいっちゃったんですよ 見られてたのが律くんだけで助かりました。お恥ずかしい」

結局、律は女の提案で「湖の風景を撮影をされていて水に落ちた」ということで申し合わせることにした。子ども心に悪いことを重ねている罪悪感はあるが、それでも女の言う「知らない方が誰も傷つかない」という言葉をよりどころに意思を押し通した。

「そんで峰さん 宿泊はご一泊？」

キヨは茶のお代わりを進めながら、女に尋ねた。

「同じ姓で紛らわしいし、さおりでいいですよ 女将さん ねえ りっちゃん？」

峰さおりと名乗った、この女は。いつの間にか律を愛称で呼び始めた。そのさおりの距離の詰め方が律は嫌ではなく、頷きでその好意に答えた。キヨは少し意外



そうに、

「あら　りっちゃんよかったわね　お友達になっても  
らったの？」と言った。

「幼稚園生やないんだからお友達なんて」

言い返しながらも、律はまんざらでもなかった。「友達」という関係はしばらく律には縁のなかったものだったからだ。さおりは律の態度を少し見て、安心したように柔らかに微笑んだ。そしてキヨに向き直り、話を切り出した。

「実は急に長期休暇が取れたので　あんまり来たことがない土地でしばらく過ごしたいと思い立って　計画何も立ててないんです　ここ何泊くらい出来ます？」  
キヨはカレンダーをめくって予定を確かめる。

「シーズンでちよこちよお客さんは来る時期だけど　うちはマイナーな宿だから予約は直前のことが多くて  
ね　今のところ離れやったら今日から二週間くらいは

空いてますよ」

カレンダーをさおりの前に差し出し、キヨが空室の日付を指でなぞった。

「そんな大層なもてなしはできないけど、さつき入ってもらった温泉と、野菜料理だけが

自慢だね そんなでよければ」

謙遜気味に話すキヨをさおりは笑顔で制して、

「じゃあ私二週間いいですか？」と言った。

キヨは、自分が空き部屋の日数を告げた手前、わかりましたと頷きながらも驚いた。

「空いてる言うたけど、そんなにここでいいんですか？二週間あったら他にも色々、巡ったりできるでしょうに 私が言うのもなんやけど、この宿も、この辺りも観光地としては小さなもんやし、すぐ飽きますよ」

「だらだらしたんですよ 刺激は少しでいいやと思つて」

「若いのに年寄りみたいなこと言うて」

「若さは仕事で使い果たしちゃって あ 煙草 ちよ  
つと外で吸って来ます」

キヨにどうぞと手で促され、さおりは立ち上がり、宿の玄関先に出た。律は興味本位でその後について行つた。さおりは浴衣の懷から小さな袋を取り出した。その仕草が、よく洋二が見ている時代劇の悪徳商人のそれに見えて、律は思わず吹き出した。

「・・・興味あるの？これ？」

さおりは律に見えるように巻紙を広げ、袋から指でつまんだ葉をパラパラと落として巻き始めた。それはするすると棒状の煙草に早変わりする、手慣れた滑らかな仕草に律は釘付けになった。続けてさおりはマッチ箱を出して一本擦り、煙草に火をつけた。甘いチョコレートトの香りが漂ってきた。

「これ チョコレートのフレーバー でも副流煙だか

らあんまりよくないね　りっちゃんはちよつとあつち  
に行つてな　吸い終わったら戻ってくるから」

室内に戻り、振り返ると、玄関の端に立つさおりの半  
身と宙を漂う煙が影絵のように見えた。

「明日、車で回つてみようと思います」

戻ってきたさおりは囲炉裏端で周辺観光の地図を広げ、  
キヨにおおざっぱな計画を伝えた。キヨは「そうねえ」  
と納得しかねる様子だったが、さおりの長期滞在の意  
志は変わらぬようなので、毎日の献立を考える覚悟を  
決めた。

「まあじゃあゆつくりしていつてください」

およそ釣り客にも見えない若い女が、そんなに長い期  
間、こんな田舎の宿に滞在する理由はなんだろうか。  
さおりの言葉の外にある思惑を、いらぬことと思いな  
がら色々と想像したが、キヨにはさっぱり分からなか

った。ただの心配性だと自分を戒め、キヨはさおりに向き直った。

「長くいるんだったら時間かけて挑戦できるのもいいかもしれんですね 釣りとか」

「そうですね 道具とか売ってますかね」

それを聴いて律が「自分のを貸そうか」と言いかけたとき、「初心者にはよう釣れんですよ ここは」と野太い声が覆い被さってきた。

洋二が入って来た。手に持ったトレイには捌きたてのしし肉の赤黒い血の色を覗かせていた。

「いらっしやい 災難やったね」

洋二はキヨにトレイを渡すと、さおりの向かいにいる律の横に胡坐をかいて座った。

「ゆっくりしてもらうのはかまわんが、山には入ったらいかんところや、したらあかんことがある それはよう守ってください」

洋二の言葉に、律はさおりのまもっていた空気が張り詰めたように感じた。しかし、さおりは笑顔を崩さぬまま、洋二に返す。

「変な事するつもりもないですけど、例えばどんなことですか？」

「立ち入り禁止の所に入るとか 釣り禁止の所で釣るとか 要は人の道に外れることや ここは街中よりそれをすることを嫌う土地ですけん」

「町中だって緩くはないですけどね 不法投棄 ごみのポイ捨てとか？」

さおりの問いかけに洋二は答えず、黙ってキヨが持ってきた茶を飲んだ。

「ちよつとあんた お客さんに変な言いがかりつけん  
という」

「言いがかりなんてつけとらん あんたにもそうとられてしまったらすまんかった ただいろんなお客さん

がおるけん 言うとかんといかんのや」

「ええ ええ そうですよね いろんな人がいますから」

さおりは至って平静に答える。律は秘密を共有したさおりの心中にまだ見ぬ深い淵があることを否応なく想像してしまい、不穏な心地で、その横顔を見た。耳にかかる艶やかな幾重もの黒髪が、自分を絡めとろうとする、あの森の枝葉やツタのように見えた。

翌日の朝、律が外の空気を吸おうと外に出ると、さおりの姿があつた。丸っこいシツクな黒の車を濡らした布で丁寧に拭いていた。

「おはよう」

律が声をかけると、さおりも振り向き「ああ おはよう」と笑顔で返した。

「さおりさんの車？」

「そう 私の愛用なの」

さおりはいかにも楽しそうにそう言いながら、窓から運転席側のボディを拭き上げている。

「特殊な塗装で洗車機にかけられないのが難点よね」

「かつこいい色」

「あ わかる？さすがりっちゃん」

さおりはより上機嫌になって車の屋根に手を伸ばし、大きく動かして拭き上げた。

「ふう さて どこか行く？」

さおりに誘われた律は、「いいの？」と目を輝かせた。

律は祖父母の許可を取り、朝食の後、共に出かけることになった。初めてこの土地を訪れるさおりを、これまで片手で数えるぐらいしか来たことがない律が案内する。律はあたふたしながら「ええっと あれがダム湖で貸しボート店が二つあるって聞いた 行つた



ことない」とか、「この先 りんごの観光農園 一度  
じいちゃんに連れて行ってもらった おいしかったよ  
まだシーズン早いけど」ときこちなく説明した。さお  
りは終始、それを「ふんふん」と興味深そうに聞き、  
琴線に触れると、じゃあそこに行ってみよう、と言っ  
てハンドルを切った。気ままな近場の旅が律には楽し  
かった。こんなことは輝幸がいた時以来だ。思えば洋  
子と二人暮らしになってから、休みの日、一緒に遊び  
に出かけるなんて事はなかったように思う。

「誘ってくれてありがとう 楽しい」

律は素直な感想をさおりに伝えた。さおりもニツと笑  
ってそれに答えた。

昼になって、さおりはアテンド代と言って、湖畔の  
店でホットドックをおごってくれた。テイクアウトに  
してダム湖のほとりの公園に寄り、二人で木陰のベン  
チに座って食べた。ダムの湖面は真夏の強い日差しを

全面に受けて白く光っていた。

「りっちゃんって普段はこっちに住んでいないのよね？」

律は突然、自分のことを聞かれ、ホットドックを喉に詰まらせそうになってせき込んだ。

「あーごめん はい飲んで飲んで」

ペットボトルのお茶を渡され、律は一気にホットドックの小さな塊を喉に流し込む。少し胸を落ち着かせてから、律は口を開いた。

「普段は隣の県の町中に母さんと暮らしてて 今はこっちで・・・」

「何で？ 夏休みだから向こうの方が友達とかいるから遊べるんじゃない こっちは同級生の友達なんていんじゃないの？」

「向こうにもいないよ 友達なんて」

律はそれだけ答え、黙った。さおりは律の告白に少し

驚き、口をつぐんだ。湖面を渡る風が二人の間を抜けていった。

律は、この山村に来る前の出来事が鮮明に蘇り、息苦しさを覚えた。さおりなら自分が抱える問題にどんな意見を持つのだろう。家族でもない、カウンセラーのような専門家でもない、でも淵の秘密を共有した同志は。

「僕は学校にも家にも戻りたくなんだ」

律はこれまでの事を少しずつ、さおりに語りだした。

学校での孤独と母との関係の悩み。律が一つ一つ、言葉を選びながらゆっくり話す間、さおりはただの一言も口を挟むことはせず、静かに聞いていた。

三十分ほど経って律は話を終えた。さおりは思案しているのか黙ったまま、中空を見つめていた。そして何か、思いついたようにくるつと律に向き直り、口を開いた。

「独占欲って分かる？」

律は首を横に振った。

「人は好きなものを自分だけのものにしたいっていう欲のこと 手元ないと苛立つ

誰かを攻撃する」

律はまださおりの言うことが分からなかったが、そのまま黙って彼女の言葉を待った。

さおりは寂しそうに唇を指で触りながら、律に自分の顔を近づけた。

「その本山って男の子のことはともかくさ・・・お母さんは多分、お父さんが大好きなんだよ」

律はまじかに迫るさおりの顔と静かな、しかし何か重要な杭を打つような強い口調に気圧された。

「お母さんは多分、「お母さん」よりも「女」の部分が大きくでさ お父さんがいなくて寂しい もちろんあなたのことも好きだろうけど それとは別の感情

だからお父さんがいなくて寂しくてイライラしてやる  
気をなくしている でもあなたも息子として大事だか  
ら「ごめんね」なんて言う 「ごめんね」しか言わな  
い」

さおりはそこまで言って、口をつぐんで顔を律から離  
し、ダム湖を眺めた。次に言うべき言葉を慎重に選ん  
でいるようだった。

「りっちゃんはさ その顔立ちってお母さん似？」

突然、話題を変えたさおりに律は戸惑ったが、うんと  
頷いた。

「ばあちゃんたちにはそう言われる でも学校では  
「オトコオンナ」ってからかわれてた。」

「やっぱり あたしも最初、会った時、女の子かと思  
っちゃった」

まあとにかくさ、ときおりは大きく息を吐き、笑って  
言った。

「お母さんはお父さんが好きで、今いなくて寂しいのよ　でもりっちゃんはお母さんにとっては子どもだから頼ったり甘えたりする相手じゃなくて、大事に見守る相手　でも今のりっちゃんの学校の問題は解決が難しくてお母さんの手に余る」

律は努めて柔らかい口調で穏やかに語るさおりの話を聞くにつれ、自分の中で色んなピースがはまっていく気がした。

「りっちゃんはお母さんに自分を見て欲しいけど、お母さんは見てくれない　多分、お母さん、お父さんのことばかり考えている　りっちゃんの前でお母さんでないといけないのに女になってるのよ　なんて分からないかなあ？　こんな話」

律は、なんとなくわかると言って頷いた。自分との関係性の中でしか相手を見ていなかった律は、改めて家での母の姿を思い浮かべた。そして母ではなく、立花

洋子として考えた。「彼女」は自分と同じ年頃の少女のような顔で、寂しいと泣いていた。

「りっちゃん」

さおりが言った。

「あんた　優しいいい男だよ　あたしは会ったばかりだけどあなたが好きになったし、おじいちゃんもおばあちゃんもあなたのこと大好きでしょう？自信もってね」

律はさおりが誰よりも自分を理解してくれている気がした。さおりと一緒にいると律は自分を縛る鎖が次々と外れ、自由になる心地がした。さおりは何か思いついたようにパツと明るい笑顔になって言った。

「これから遊びならとことん付き合ってあげる　あたし暇なの」

「釣り？」

突然、さおりから釣りスポットを聞かれ、洋二は庭から見える山々を見渡した。両手には収穫したてのナスやらきゅうりやらが盛られた籠をもっている。

「ダム湖の周辺とか貸しボートで湖の赤い橋あたりまで出ればいいかもしれんが」

「了解　ちよつと行ってみますよ　あと律くんまた借ります」

そういったさおりの後ろから律が顔を出して、洋二の気配を伺った。律はこの日、いつもより一時間以上、早く起きて野菜の収穫やら朝ごはんの支度やらを手伝っていた。洋二は「そういう魂胆か」と律の思惑を察して、苦笑した。

「ええ　ええ　行ってきたらいい　じいちゃんが教えた場所もいいぞ」

洋二はにこやかに言って許しを出した。

「じいちゃんが言ったところ　釣れなかったよ」



律は不満を言いながらも嬉しそうに「ありがとう」と言った。洋二は財布を出して紙幣を何枚か、律に渡した。

「ご飯とか貸しボートとかの自分の分は、これから出せ あんまり迷惑かけちゃいかんぞ」

「迷惑なんてねえ 楽しいもんね」

さおりは笑って律と顔を合わせた。洋二は来たばかりのころと比べ、自然な笑顔を見せるようになった律を見て安堵していた。自分たちでは無理だった孫の笑顔を客の彼女が引き出してくれたのだ。

「日が暮れるまでには帰って来いよ」と言って洋二は二人を見送った。

「どこに行こうか」

さおりはそう言いながらも車をダム湖の散策道近くの公園に向かって走らせた。向かう途中で律には、さお

りがどこに行こうとしているか気づき、好奇心と罪悪感で胸がいつぱいになった。

「もしかして心中淵？」

「あたり！」

さおりは不敵な笑みを浮かべた。

「二人とも通ったことのある道なのに一緒に今、歩いているって不思議だね」

さおりは好奇心を抑えられないといった興奮した声で言った。律は強く頷き、心の中で「じいちゃんごめんとつぶやいた。

二人は、あのとときに見た淵の主らしき生き物をもう一度、見たいと思っていた。黒々とした深い淵の底から顔を出す、あの怪物がどんな姿をしているのか。何か策があるわけでもなく、ただ見ることしかできないのだが、あわよくば写真に撮ることぐらいできるので

はないかという期待があった。二人とも携帯電話を持つてきていたし、充電も満タンだ。

「しばらく様子見たらすぐに帰る　危ないことはしない」

「しばらく様子見たらすぐに帰る　危ないことはしない」

律はさゆりの言葉を繰り返し、二人は顔を見合わせて笑った。

やがて淵が見えてきた。期待通りの光が降り注ぐ美しい滝つぼの淵は、この日も変わらず黒々とした水をうねらせていた。二人は岩場に座って、ただじつとこの淵の空間を味わった。

「出てくるといいね」

「釣り竿垂らしたら出るかな」

「逆にひっぱられちゃうかもよ」

さおりと話をしているこの時間が、律には幸せだった。

「あたしね」

しばらく経ったころ、ふいにさおりが話し出した。

「りっちゃんに初めて会った時、本当は死のうとしていたの　ここで」

その突然の告白に律は驚き、自分が幽霊と見間違えたのはあながち間違いではなかったのだという、奇妙な考えが浮かんだ。

「何かあったの？」

さおりは寂しそうに笑って、律の頭を撫でた。初めて見る表情だった。

「好きな人がいてね　二年前からお付き合いしていたんだけど、その人には奥さんがいるの　もう別れようって相手の人に言われてね　たったそれだけ」

さおりはそう言って、滝つぼに目を移した。

「あたしはどうせ未来がないから別れる覚悟をしたつもりだったけど 何か踏ん切りつかなくて その人が奥さんという夜中の時間帯に、わざわざ電話をかけて「今、愛しているって言って」って無理なこと要求した・・・そしたら電話切られちゃった」

馬鹿みたい。さおりはそう言って顔を伏せた。律は悲しい罪の告白に、しかし、どこか自分と同じ苦しみを感じた。

「さおりさんも自分が嫌いなんだね」

二人はしばらく黙って淵を見ていた。黒々とした淵の水は滝と共に落ちてくる枯れ葉や流木をあつという間に飲み込んだ。

「りっちゃんさ この前、淵に飛び込みたいって思っていたんじゃない？」

さおりの言葉に律は心臓をつかまれたような心地になった。

「岩の上からあなたを見かけて、淵を見るあなたの顔を見て ああ これはあたしと同じだってなんとなく思ったの 鏡を見ているみたいだった だからわざと携帯のカメラの音を鳴らしたんだよ」

律は、あのカシヤつという音が自分に向けて放たれていた声だったことを知り、ひどく驚いた。そして、その時、既にさおりが律の淵を見透かし、助けようと手を差し伸べてくれていたことを知った。

さおりはそつと律の背に手を回し、肩を抱いた。その手のぬくもりに触れ、律は我慢できなくなって涙を流した。

「あたしは身勝手ばかり言ってここで死のうとしたあなたも身勝手かもね だから二人とも、立ち入り禁止の場所にいる だけど、じいちゃんたちの里では“人の道に外れることはしてはいけない”んでしょ？」

家出てきた律を何も言わず、受け入れてくれた洋二とキヨの顔が浮かんた。自分が暗闇だと思っていた淵の底から思いもよらない温かいものを見つけ、律は生きて洋子と、そして本山にも向き合わなければと思つた。

ばしゃん。

その時、ひときわ大きな水音が聞こえた。二人ははつとして、淵に顔を向けた。淵の水面には、今までには無かつたうねりが生まれていた。黒い艶のある体が水面からせり上がり、大きな顔が見えた。長い髭と横に広がった口はナマズのようなだった。二人はひと時も瞬きすまいと、携帯を構えることも忘れて、うねるその淵の底から来た怪物を見続けた。怪物は大きな口を二人に向け、見えない何かを飲み込むように大きく開けた。そしてゆっくりと口を閉じると、身体をくねらせて跳ねた。巨体がほんのわずかに浮き、怪物は激しい

水しぶきと共に、ずるりと淵の底へ消えていった。

律は満面の笑みで、さおりと顔を見合わせた。涙はもう乾いていた。

「やっぱ写真どころじゃないって感じ　僕たち運がいい」

「うん」

さおりは深い感嘆のため息を吐いて、淵に視線を戻した。

「淵の主があたしたちの色々を飲み込んでいってくれたんだよ　きつと」

律はさおりの言葉に頷いた。淵の底には案外、恐ろしいものばかりが棲んでいるとは限らないのだ。律は淵に落ちる滝を見上げた。差し込む太陽に光る水しぶきが空中で煌めき、無数の雫となって二人の上に降り注いでいた。

了